
辺境護民官ハル・アキルシウス

あかつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

辺境護民官ハル・アキルシウス

【Nコード】

N1855Z

【作者名】

あかつき

【あらすじ】

帝都で治安省の下級官吏として勤めていたハル・アキルシウスは、とある出来事で蛮族が跳梁する北方辺境へ左遷されてしまう。文化、習俗、人種の著しく異なる辺境の地で、ハルの奮闘が始まった。

序章 その1（前書き）

色々と試していこうと思い、この作品を作り始めました。
お楽しみいただければ幸いです！

序章 その1

丁度峠も登りから下りに差し掛かる、少し開けた場所で、旅装に身を包んだ青年は額の汗を拭い、見渡す限りの緑の大海原に、思わず歩みを止めて見とれた。

所々に森が切り開かれ、畑や牧草地が形成されており、その近くには村落と思しき粗末な屋根の建物が立ち並んでいる。

しかし炊煙と思しき煙が薄く立ち上るそれ以外の場所は、うつそうとした森が未だ手付かずの風情で広がっており、天気の良い今日はその先の遙か彼方にある大東山脈までもがうつすらと目にするこ
とが出来た。

「これは凄い・・・こんな景色は始めて見た。」

誰に言うとも無く、ぼつりとつぶやく青年の背中には、はちきれんばかりに何か詰込まれた背負い袋。

暑い最中にもかかわらず、厚手の衣服にがつちりと革のブーツで整えられた足元、左手に引く手綱の先には馬が一頭ついて来ている。

青年に続いて素直に歩みを止めた馬の背にも、見ればかなりの荷物が左右に振り分けて結わえ付られている。

「さあて、もう一息だ。」

そついいながら、馬を優しく促し歩き出す青年。

背丈はそれほどでもないが、がつちりした体格、短く刈りそろえられた髪はつややかな黒色で、目は涼やかな一重目蓋。

服装も帝国風に縫製されてはいるものの、布地の色彩や材質は帝国南方の群島嶼地方のものであり、その特徴的な風貌と相まって、青年の出身は帝国に住まうものであれば一目見ただけで南方のヤマトの民と分かる。

しかし、旅の商人にしては、青年の雰囲気は固く、客商売が向くような感じではない。

また、荷物もこのような辺境で珍重される宝飾や酒、穀物といっ

た商品ではなく、どちらかと言うと生活用品が多く見て取れる。

「もう少しでアルマー族長の集落に着きますよ。」

その後ろからたおやかな女性の声が青年の背に向かって発せられた。

「・・・何時までついて来る気ですか神官殿？・・・いい加減に戻られたらどうですか。」

「太陽神様の御導きを無碍にする事は出来ません。」

うんざりしたように後ろを振り向いた青年の目に、特徴的で鮮やかな色彩の貫頭衣を身に纏った20代前半の女性が映る。

青年と同じくらいの背丈があり、細身でその長い髪は金色、目は緑色。

典型的な北方の民クリフォナム人の特徴を備えたその女性は涼やかな笑みを浮かべながらも、青年の言葉をやんわりと否定する。

「いや、それは違う、私はただ職務として山賊を追っただけ、そこにあなたがたまたま縛られて転がされていただけの事。」

「いいえ違います、太陽神様があなたをあの場に御導き下さらなければ、私は人の姿をしたケダモノにもいいようにされてしまっていたでしょう。」

胸の前で手を組み合わせ、そのときの恐怖と安堵を思い出しているのか、目をつぶってその女性神官は言う。

「・・・その件はもう忘れていただいて結構だと、さっきから言っているでは無いですか！そもそもあなたは大地の巡検とか言う、修行の旅の途中では！？」

「恩を受けた相手にその恩を返すのもまた修行です、そもそも、あなたは地理不案内で困っていたのではないのですか？」

青年の言葉をさらりと受け流し、女性神官が切り返すと、青年が困惑の表情となる。

「・・・それは・・・」

「ですから、私が道案内をして差し上げましょうと・・・」

「要らない道の案内までしようとするからでしょう！」

一旦困惑の表情になった青年だったが、再び額に青筋を浮べて怒鳴る。

「太陽神に仕える神官は婚姻を否定されておりません、私は何時でもオツケーですよ？」

「……自分はおっけーじゃ無いのです。」

涼しい顔をして言葉を返す女性神官にいささか疲れた様子で返事をする青年に、女性神官はくりっと首を傾げてぼそりとつぶやくように言った。

「……照れなくとも良いではありませんか？」

「ちがうわっ！」

「そうむくれないで下さい、せつかくの旅の道連れ、楽しくおしゃべりでもしながらの方が楽しいですから。」

「……。」

「私はこう見えてもこのあたりを旅し始めて10年近く経ちます、この北方辺境の村々には知り合いも多く居ますし、道案内も出来ます、あなたの御役目にもきつと役に立ちますよ？」

「……。」

「夜の御役目にも、ネ。」

「……。」

「……そんな目で見ないで下さい、ちょっと変な気分になってしまいます。」

「……。」

「……。」

「……分かった、夜は置いて、宜しく願います……。」

「……そんな、一番大切なところなのに。」

「置……いて……くれ。」

「……分かりました、でも、いつでもいいですからね？」

「……はあ……」

結局日中に目的地であったアルマー族の村落へたどり着けず、野営をする羽目になった青年と女性神官は、ぱちぱちとはぜる火を囲んでとりとめのない会話を交わしていた。

青年が持っていた鍋には小川で汲まれた水が焚き火にかけられ、ぐらぐら音を立てている。

青年は道々で摘んだ野草、それから持っていた穀物のかたまりと干した猪肉を用意する。

「……そろそろ御名前を聞かせていただけませんか？」

「ああ、自分はハル・アキルシウスと言う、帝国辺境領担当の護民官だ。」

女性神官の問いかけに、青年、ハルは食材の準備をしながら素性を含めてあっさりと答える。

素直に答えをくれるとは思っていなかったのだろう、女性神官は少し虚を突かれたのか、一瞬戸惑いの色を見せたが、すぐに気を取り直し、自己紹介をする。

「……そうですね、私はクリフォナムの太陽神に仕える神官、エルレイシアと申します、宜しくハル、そして助けてくれて有難うございました。」

「いえ、職務ですから……それから、アキルシウスと呼んで下さい。」

少し口を濁らしたハルに、エルレイシアは諭すような口調で言葉を返した。

「ハル、ここは帝国の州内ではありません、帝国領域という境界の曖昧な辺境の地、そのあなたが仰る職務というものがどれほどの力を帝国で持っているのか私には分かりませんが、為した事は全てあなたが成した事、為す事、それは覚えていた方が良くと思います。」

「……分かりました、ご忠告に従いましょう、が、アキルシウスとお呼び下さい。」

しつこく呼び方を訂正しようとするハルであったが、エルレイシ

アは意に介さない。

「ハルは案外素直なのですね、帝国の護民官といえば、辺境を帝国の版図に組み込むべく働く尖兵のようなものと聞いていましたが・・・」

エルレイシアが違和感を感じたのか、思わずそう口にする、ハルは根負けしたのと、エルレイシアの言葉の内容両方の理由から苦笑いを浮かべ、煮立った鍋の中に野草と干し肉を入れ始めた。

ぐつぐつと順調に煮え始めた鍋を見届け、ハルはエルレイシアに向き直る。

「そういう、役目も負わされている事は否定しないが、ただ、自分が見ての通り、生粋の帝国人という訳ではないので、そこまでその類の仕事に熱心なわけではない、自分は命令された表向きの役目を果たすだけだ。」

「・・・そうですか・・・帝国人がみなあなたと同じ考えなら、クリフォナムの民とも上手くやっていけるのでしょうか・・・。」

エルレイシアがそう言いながらため息を付くと、ハルは厳しい顔になり頷いた。

その理由はハル自身が一番よく分かっている。

「先程の山賊も、帝国人だったからな。」

帝国は、ここ1000年で最も大陸で栄え、そして強大化した国家である。

大陸中央部に端を発した帝国は、王政、共和制を経て頂点に皇帝を戴く現在の政体になった。

東は東照帝国とその南に存在するシルー八王国という大国と接し、西は大洋を挟んで西方国家群と接する。

南は群島嶼地域と呼ばれる半内海で、更に海を経たその先には南方大陸の部族国家が存在し、船舶による交易や通行が盛んに行われ

ている一方、北方は北方大平原と呼ばれる森と草原が広がる未開の地域である。

大陸にはかつて様々な国家や都市が存在したが、帝国の膨張と共にそれら近隣の小国家や、かつての覇権国家は戦争や政争、果ては経済戦争に敗れた末に吸収されてその一部となった。

しかし、大陸には未だ帝国の力が完全に及ばない地域も存在する。元々文化的には南方の系譜を引く帝国は、寒さに弱く、また距離的な理由もあって北方辺境の支配はそれほど進んでいない。

南方の群島嶼地域と併せ、北方は帝国の2大辺境であったが、つい5年ほど前に群島嶼諸国連合は帝国との激しい戦争の末に敗れて完全に併呑されたため、今や北方は帝国唯一の辺境となった。

帝国は支配した地域に州を設置し、総督を帝国から派遣して支配に当たらせる。

しかし、北方辺境の地は未だ部族社会が主体の帝国人が蛮族と呼ぶ人々が住み暮らす地域で、帝国の領土宣言があるとはいえ、あくまで対外的なものであり、実際は支配が行き届いているとはいえない地域であるため、州を設置していない。

そのため、辺境護民官という官吏を派遣し、その地域の部族民の宣撫工作や懐柔、そして討伐に当たらせる制度が出来た。

名目上は帝国の領土である事から、護民官の身分は内務官吏に準じ、権限は徴税や民政に留まらず、警察権や裁判権、そして有事の際の帝国軍の派遣要請権やその一時的な指揮権、そして暫定的な兵員招集権までを有する、非常に強大な権力を持った官吏である。

派遣された地の民度が上がり、帝国に編入可能なだけの税収や財政上の基盤が出来上がり、皇帝の命令により州が設置された段階で権限は自然消滅する。

後は本人が望めば新しく設置された州の官吏、多くは州総督として採用されることが慣例であったが、かつては高級職を目指す優秀な官吏の登竜門であったため、新設の州総督で終わる者はほとんど居らず、大抵が中央に栄転していった。

しかしそれも今や昔の話。

与えられた権限は辺境地域だけのものに限られるとは言え、権限の大きさ相応の位階が付与されているとはいえ、現在では決して栄達や名誉のある官職とは言えなくなってしまうていた。

その理由は明白で、近年目ぼしい地域にほとんど州が設置されてしまったことから、辺境護民官はいわば実体の無い名誉職となり、老齢で退役間際の官吏や、何か問題を起こして元の職場に置く事が適当でない官吏を左遷する為の官職となってしまうている。

当然、現地へ赴く者など全く居らず、一応設定されている3年間の任期が切れた段階で退職するか復職する為、その任期は自宅で引退前の有給休暇として家族と過ごすか、半ば謹慎扱いでいる者がほとんどであった。

そんな閑職と成り下がった辺境護民官であるが、本来帝国の内務官吏に帯剣は許されていないところ、辺境護民官だけはその任地や職務の特殊性から帯剣と武装が許されており、実際、ハルも着込んでいるのは厚手の帷子、武器は刀、小刀、弓矢を持っており、荷物の中には先祖伝来の鎧兜も入っている。

ただ、帯剣許可も今や現地に赴くものが存在しない事から形骸化している。

「それで、ハルの任務と割り当て地域はどこなのですか？」

「・・・クリフォナムの民が住まう地域だ・・・」

「・・・えっ！？正気ですか？」

ハルの言葉に驚きを露わにするエルレイシア。

それも当然、クリフォナムの民とは北方辺境は愚か、はるか極北地域にまで居住地を持つ北の民である。

民の中でも更に数十の部族が存在しており、更にその部族の中でも住み暮す地域ごとにそれぞれの首長が居る。

人口にすれば帝国と同じくらいの規模であり、居住地域は北方領域だけで見ても帝国のほぼ半分の広さがある上、極北地域まで入れ

れば、帝国の優に4倍から5倍の領域になる。

しかも、その地域は帝国のように道路や港湾が整備されてはならず、部族の者が付けた道があるといっても、無いよりはましといった風情のもので、その他は丸っきりの未開の地域であった。

帝国がただ単に東方の諸国への軍事的な牽制の意味合いから、領有宣言をしただけの地域で、名目上はともかく、一度も帝国が実質的に押さえたことのない地域であり、帝国に反抗してはいないものの、支配を受け入れているわけでもない。

むしろ帝国の領域である事を知っている者は部族長や首長くらいの主だった者だけで、そのほかの民は全く名目上とはいえ帝国の支配下にあることすら知らず、政治的なこととは関係なく日々生活している。

そのような人々を帝国に恭順させようとしてもできるわけがない。

ましてや官吏風を吹かせて統治など出来るはずも無い。

笑われて終わるか、機嫌を損ねれば殺されてしまう。

また、クリフォナム人は、蛮族とは呼ばれてはいるが、誇り高く、武を重んじるという蛮族特有の性質を有してはいるが、文字を知り、農業を知る民であり、無用な争いや混乱を望まない民でもあり、真性の蛮族というわけではない。

身体的には特徴があり、他の帝国領域に暮らす者達とは著しく異なる為、差別的な扱いを受けることが多いが、文化水準はそれなりに高い。

帝国内の人民の多くが黒か茶色の髪の色を持ち、瞳の色も黒か茶色であるが、クリフォナムの民は、長身、白皙、金色や銀色の髪を持つものが多く、また瞳の色も青や灰色、緑色の者が多くいる。

同じような人種として、北方領域の南部及び西部に住むオラン人がいるが、文化的にはかなりの差異があり、おまけに両方とも長年の領域争いがあつて、互いを嫌っており、争いが絶えない。

ただ、言葉にそれ程違いがなく、帝国公用語であればクリフォナム人やオラン人も理解する事が出来る為、大陸では帝国公用語が共通

語として使われており、救いと言えば言葉に不自由はしないと
事ぐらい。

そのような辺境の真っ只中にたった一人で派遣された、ハル・ア
キルシウスであった。

序章 その2

「うん、どれだけか広いかわからないが、全部だ、全部といわれた、任命書も有る、任期は一応5期15年、クリフォナムの民を恭順させられなければもう15年、恭順させるまでは戻らなくとも良いと思うだ……」

努めて明るく言うハルに、エルレイシアが少し言いくそうにしながらもずばりと聞く。

「……それって、左遷ではありませんか？」

「……そうとも言っな。」

一瞬、詰まったが、ハルは任命書をエルレイシアに示しつつ答える事が出来た。

「……何をしたのです？」

「……内緒だ。」

「教えてくれないと、夜中に襲っちゃいますよ？」

「……」

怯えを含んだ目でエルレイシアを見るハル。

「そんな顔をされると、ちよっぴり傷つきます。」

顎の下に人差し指を付け、あざとい表情でハルを見つめるエルレイシア。

ハルはがっくりと疲れたように顔を落としてつぶやいた。

「何でこんなの拾ってしまったのか……」

丁度いい具合に沸騰し始めた鍋を見ながら、ハルは反論を諦めて任命書をしまうと、鍋に用意していた食材を投入し始めた。

「あ、これは米ですね、初めて見ました、干して固めてあるのですか？」

「ああ、そうだ、煮てやれば元に戻る、しかし、米を知っているのか、物知りだな。」

エルレイシアが食材に興味を示し、話題が変わった事にほっとし

ながら、ハルは質問に答えた。

「はい、帝国製の博物学の書籍を見たことがありますて、温暖で湿潤な気候でないと育たないとか・・・残念ながらこの辺りでは育ちませんね。」

「ああ、無理だな。」

北方辺境とは言っても、あくまで帝国から見れば北方なのであり、気候はそれほど厳しくはないが、それでも米の生育には条件が悪い。帝国、そして北方の民のクリフォナム人も基本的には麦を育てている。

米を主として生産しているのは帝国では群島嶼部のみで、他には東照帝国が主要な穀物としている。

しかし、米は麦に比べて単位面積当たりの収穫が多くはあるものの、豊作と凶作の格差が酷く、東照帝国では凶作のたびに政情不安が起きている。

ハルは木製のおたまを取り出し、ゆつくりとかき混ぜながら鍋が煮えるのを待つ。

しばらく、無言の時間が過ぎた。

ハルは、ゆつくり、そして静かに手を動かし、エルレイシアは今までのおしゃべりが嘘のように、落ち着いた表情でその様子を黙って眺めている。

そして、出来上がりが近付くと塩と香草を刻んで乾燥させたものを投入し味を調える。

「ハルは準備万端ですね？白塩や香草を用意しているなんて・・・」

「色々言いたい事はあるが、とにかくあなたは・・・そうか、賊に捕まってたんだっけな・・・」

「はい、荷物は全て失ってしまいました、食糧や衣類はともかく・・・経典や神話辞典を失くしてしまったのが心苦しいですね・・・私の師から賜ったものだったので・・・」

エルレイシアは少し寂しそうに言った。

「・・・すまん。」

「いえ、良いんですよ、ハルが悪いわけではありませんから。」

「あーいや、その、実は・・・荷物は・・・」

「？」

言葉を濁すハルに、エルレイシアは訝しげな表情で小首をかしげる。

その様子に心苦しさを感じたのか、ハルはエルレイシアから視線を外して口を開いた。

「あるんだ、実は、奴らが追ってこれないように、食糧や水が入ってた背囊を持ってきたんだが、それと一緒にくたになつてて分からなくてな、色々本やら女物の服やらが入ってた、多分あんだのだろう。」

「

「!?!?」

「つい、言いそびれてしまって・・・」

そう言いつつ、ハルはバツの悪そうな顔のまま、一段落付いた調理の手を止めて徐に立ち上がると、自分の荷物の中から綺麗な刺繍が施された鞆を取り出した。

「これだろう？早めに言わなくて悪かった。」

ハルは鍋の側に戻りながらバツの悪さを取り繕うように、ぼんぼんと軽く表面についたほこりを手で払ってから、エルレイシアに鞆を手渡す。

「・・・」

「・・・」

無言でハルを凝視したまま、エルレイシアは鞆を両手で押し頂くように受け取る。

「・・・」

「・・・だから、悪かったって言うてるだろう・・・」

その無言と視線を抗議のものとして解釈したハルが我慢しきれずにそう言つと、エルレイシアは受け取ったかばんの中から一筋の細い黄色の布を取り出して、ハルに近付く。

「な、なんだ・・・」

座ったまま身じろぎするハルに構わず、エルレイシアはその布をハルの帯の左脇部分に結びつけた。

「これは太陽神のお守りです、これを収めてください。」

「・・・ああ、ありがとう。」

ようやく口を開いたエルレイシアに、安堵したハルは素直にそう言ってお守りを見る。

「綺麗な色だな。」

何で染められたものだろうか、鮮やかな黄色が紺色の帯に映える。「良く似合っていますよ。」

笑顔で言うエルレイシアに、少し照れ臭そうな顔をしたハルは、木の椀を2つ荷物から取りだし、良く煮立てた粥をよそって木の匙と一緒にエルレイシアに手渡した。

エルレイシアが椀を覗くと、ほんのりと香草の香りが湯気と共に漂う。

早くも粥を食べ始めるハル。

エルレイシアは椀と匙を奉げ持ち、しばらく瞑目して休んでいる太陽神への感謝の祈りを口ずさんでから、徐に匙で粥をすくい、口へと運んだ。

「・・・おいしい」

「だろう？残り少ない米と香草だが、今日は特別だ、捕らわれの身で体が弱っているだろうからな。」

おいしそうに粥を口にするエルレイシアに、ハルはそう言いながら素直に嬉しそうな笑顔を浮べる。

粥を口にしながらも、木椀ごしにハルのその笑顔を上目遣いで盗み見ていたエルレイシアはポツリとつぶやく。

「・・・そういう、さりげない優しさは、ずるいですね。」

声は小さく、相手には届かない。

「何だ、お代わりか？」

もりもりと粥を平らげていたハルは、手が止まったエルレイシアを認め、自分の木椀を傍らに置くと、うん、と頷きながらしゃもじ

を持ち、空いた手をエルレイシアに差し出す。

「遠慮しなくて良い、少し多めに作って置いたからな。」

「……いえ。」

盗み見ていた事に気付かれ、顔を赤らめたエルレイシアは、慌てて視線を逸らしまだ椀に残る粥を匙で口に運ぶ。

その様子を見たハルは、しばらくしてエルレイシアが椀を空にするのを待つてから、その椀を取り、粥を満たしてから返した。

そうして食事が終わると、ハルは手早く食器を汲み置いていた手桶の水で濯ぎ、空拭きした後立ち上がると、馬から下ろした荷物場所へと歩いて行く。

そして食器を片付けると共に中に入っていた毛布を取り出し、火の近くに返るとエルレイシアへ手渡した。

「……何時から捕まっていたのかは知らないが、疲れているだろう？俺は大丈夫だから休んでおいてくれ。」

「はい、それでは……」

確かに道中で山賊に襲われてから縄で縛られ、まるで荷物のように運ばれるだけであったとは言え食料や水はほとんど与えられなかったために、体力は消耗している。

エルレイシアは素直に毛布をハルから受け取ると、火のそばに座ったハルの横へいそいそと寄り添い、こてんと横になった。

頭はもちろんハルの膝の上。

「……何をしている……」

ぴしつと青筋を再び浮き出させるハル。

「えっ？」

何を質問されているか分からないといった様子でハルを見上げるエルレイシア。

そして毛布から両手をちょこりと出し、ぽすつと打ち鳴らした。

「そうでした、忘れていました。」

「神職の身で慎みや遠慮を忘れていたとは不幸だな、まあ思い出したのなら良いから、どけてくれ。」

ハルが身じろぎすると、エルレイシアはがしつとその膝頭を意外と強い力で掴んで固定すると口を開く。

「ハルが襲っても良いんですよ？」

「寝ろっ！！！」

序章 その3

もう少しハルの顔を正面から見てやろうと身じろぎしたエルレイシアに、ハルが気付いて目を覚ます。

「ああ、起きたのか。」

「はい・・・あん、そんな・・・」

「・・・妙な声を出さないでくれ。」

ハルはエルレイシアの肩を優しくも強引に押しつけて起き上がらせると、すぱつと毛布をはぎ取って自分も立ち上がる。

無理矢理起こされ、毛布を取り上げられたエルレイシアが抗議の声を上げるが、ハルは意に介さず、突き立ててあった矢を矢筒に戻し、弓の弦を外す。

「今日の昼までには村に着きたい、馬に乗って良いから急ごう。」

「同行しても良いのですね？」

「・・・不本意だが仕方ない、兎に角、まずは拠点を確認しなければいけないからな。」

エルレイシアの言葉に渋々頷き、ハルは荷物を手早くまとめ、それを自分で背負い、てエルレイシアをひよいと軽く抱き上げる。

「ではお勤めをお願いしようか。」

「えっ？」

思いがけなく抱き上げられ、あまつさえ昨夜あれほど拒んでいたとは思えない言葉に、期待感と動揺でハルを見つめるエルレイシア。しかし、熱っぽく見つめるエルレイシアの視線をいぶかしげに流すと、ハルは若干空いた馬の背にエルレイシアを乗せた。

「・・・何ですか！」

「・・・何だ？」

「酷いです、期待させておいて・・・」

「・・・道案内で何を期待するって言うんだ？」

微妙に噛み合わない会話。

ハルはエルレイシアの抗議に疲れた声で答え、馬の口取りをするべく綱を手にし、森の小径を進み始めた。

アルマール族の族長である、アルキアンドは帝国から発出された一枚の文書を前に思案する。

ここは村の中心に所在するアルマール族長であるアルキアンドの屋敷。

その中でもとりわけ広い食堂に村の主立った者達が勢揃いしていた。

「辺境護民官だと？なぜ今になってこんなモノが派遣されてくるのだ。」

長老と思しき人物がつぶやく。

「かれこれ40年以上もそんなモノは来なかったのに。」
若者が発した戸惑いの声に、周囲の者達も頷く。

正式な形で発出された、族長宛の依頼文。

そこには辺境護民官を任じ、クリフォナ地域の担当者として派遣する旨が記されており、アルキアンドに便宜を図るべく要請されていた。

辺境護民官と雖も管轄を持つ帝国の官吏であり、以前はともかく現在は帝国の治外に有るアルマール族がこれに従う必要は全く無い。そうであるが故の依頼文なのだが、出して来た相手はあの強大な帝国の行政府である。

無碍にする事も出来ない。

夜もかなり遅いが誰一人帰ると言い出すものは無く、村は静かな興奮に包まれていた。

アルマール族はクリフォナム人に属する部族で、北方辺境の最南部に位置する南クリフォナ領域を生活圏としている為、早くから帝

国を始めとする、内海沿岸のセトリア諸国と交流が深く、クリフォナムの民の中でも文化習俗共に比較的帝国寄りである。

もつとも、協調路線を目指すアルマール族の思惑は外れ、ここ最近は退廃し始めた帝国との交流は上手くいっているとは言えず、帝国の威圧的な外交姿勢とその帝国人による横暴や進入に悩まされる辺境の一部族に成り下がっていた。

一時はセトリア諸国や帝国の前身であるハリア王国と対等な同盟関係を結び、北方辺境に睨みを効かせた時代もあったものの、時代が過ぎるにつれ、部族は帝国からもたらされた文明と疫病、そして様々な要因による帝国への人口流出で勢力を失った。

その後は辺境護民官の赴任の後、帝国州の設置がなされ平和的に帝国へと編入されるかに見えたが、40年前に起こったクリフォナムの民の帝国への大反乱によって他の部族に引き摺られる形ではあったが、一応の自治を取り戻す。

今は中部クリフォナにおいて一大勢力となっている、アルフォード英雄王率いるフリード族に一応の臣従を誓う一方で、帝国側の態度で幾度となく破綻寸前まで至りながら、協調的な交流をなんとか保つことで均衡を図り、比較的平和な時代が続いていた。

そこへ降って沸いた帝国からの依頼文である。

40年前の反乱で陣頭に立ち、帝国の勢力を州設置前の国境まで押し戻した英雄王がこれを知ればどう思うか。

穏健派であるアルキアンドから見てもこの依頼文は些か乱暴であり、まともな文面だけを受け取れば、どう考えてもクリフォナムの民を挑発しているとは思えない。

「帝国はいったい何を考えているのじゃ・・・戦争をしたいのか？」
そんな情勢に無いのはお互い様である。

帝国は軍内部の派閥争いに皇族と官吏が加わり腐敗と混沌が浸透しつつある。

一方、クリフォナムは老いた英雄王の後継者問題が持ち上がっている。

かつてアルフォード王と共に帝国と戦った事のある長老は深いため息を吐き、上質な羊皮紙で作成された厄介事の種を恨めしげに見つめる。

「・・・往事の勢いを失ったとはいえ、帝国は帝国だ、どんな謀略を凝らしているか分かったもんじゃあ無い、一度英雄王にお伺いを立てるべきじゃ。」

「いや、ここは帝国に従う方が良い！」

長老の一人が見解を開陳し、それに血気盛んな青年が反論したことで、アルキアンドの屋敷はたちまち議論の渦に巻き込まれ、一瞬で白熱した。

聞いている限りは、英雄王の意を酌み、護民官を拒否するという意見と、帝国に従い、護民官を受け入れるべきであるという意見が対立している。

アルキアンドはしばらく熱心に議論する人々の様子を伺い、意見が集約されるのを待つ。「どうするかろう、長よ。」

やがて議論は自然と下火になり、最初に発言した長老がアルキアンドに決を求めた。

「・・・帝国からの通知を見る限りでは、我々に対して護民官の受け入れは求めている、ただ、かつて帝国が拠点としていた、シレンティウムに赴任する旨が記されている。」

「しかし、あのような場所に人が住めるわけがなからう、結局は最寄りの我らが面倒を見る事になるではないか。」

シレンティウムとは村の西南方向に有る帝国都市の廃墟で、かつて帝国の最北の州として栄えたクリフォナ・スペリオール州の州都ハルモニウムのことである。

調和の都市と言う意味で名付けられたハルモニウムは大陸陸路の中枢として栄え、その繁栄ぶりからカプト・ノムル（北の都）とも呼ばれた。

北はクリフォナムの民が、西からはオランの民が、東は東照の商人達がはるばる沙漠と大森林を超え、東南からはシルーハの隊商が、

そして南からは帝国の文物が集まり、世界の都と称された帝都に勝るとも劣らない殷賑ぶりを内外に謳われていたのである。

しかし40年前のクリフォナムの大反乱で、帝都の尖兵たるハルモニウムはクリフォナムの英雄王ことアルフォードの猛攻を受ける。都市警護の帝国第21軍団は果敢に戦うも衆寡敵せず全滅、ハルモニウムも陥落し、クリフォナ・スペリオール州は事実上消失してしまった。

それでも3日で陥落と言われた都市を5ヶ月にわたって守り、最後は満身創痍でアルフォード王に一騎打ちを挑み、激闘の末敗れたアルトリウス軍団長の逸話は帝国で今も語り継がれている。

今はシレンティウム（静寂の都）と呼ばれ、死霊悪霊が真つ昼間から屯する禍々しい残骸が残るのみ、帝国は書面や地図上では、クリフォナ・スペリオール州を未だ記載し続けているものの既にその事實は失われて久しく、帝国の財宝探しや腕試しに訪れる以外に人の寄りつかない廃棄都市である。

何かに気が付いた長老がアルキアンドに顔を向けた。

「もしや・・・左遷か？」

その言葉に頷くアルキアンド。

文章の端々に、面倒を見てやって欲しいが余り構う必要は無いといった雰囲気かじみ出ている。

帝国内部では日常茶飯事と化している官吏や軍人の諍いや出世争いは辺境にまで轟いていた。

「・・・特に軍や官吏を連れて来て州を復活させるという訳でもなさそうだが、アルフォード王に知らせる必要はあるだろうが、受け入れて良いと思う、既にこちらに向かっていてもいるようだ。」

「ふむ、1年か2年我慢するしかないか・・・」

若者の言葉に大勢は決し、アルキアンドは直ぐさま帝国の文章を持たせた使者をアルフォード王に発する。

そして辺境護民官を受け入れる準備を始めたのであった。

序章 その3 (後書き)

アルトリウスという名前が好きなので、過去の英雄として登場して貰いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1855z/>

辺境護民官ハル・アキルシウス

2011年12月11日19時52分発行